



Platform Settings

- [NTP サーバ認証の有効化 \(1 ページ\)](#)
- [日時の設定 \(2 ページ\)](#)
- [SSH の設定 \(8 ページ\)](#)
- [TLS の設定 \(9 ページ\)](#)
- [Telnet の設定 \(11 ページ\)](#)
- [SNMP の設定 \(12 ページ\)](#)
- [HTTPS の設定 \(21 ページ\)](#)
- [AAA の設定 \(34 ページ\)](#)
- [Syslog の設定 \(46 ページ\)](#)
- [DNS サーバの設定 \(48 ページ\)](#)
- [FIPS モードの有効化 \(50 ページ\)](#)
- [コモンクライテリアモードの有効化 \(51 ページ\)](#)
- [IP アクセスリストの設定 \(51 ページ\)](#)
- [MAC プールプレフィックスの追加とコンテナインスタンスインターフェイスの MAC アドレスの表示 \(53 ページ\)](#)
- [コンテナインスタンスのリソースプロファイルの追加 \(55 ページ\)](#)

NTP サーバ認証の有効化

NTP サーバ認証を有効にするには、Firepower 4100/9300 シャーシで次の手順を実行します。



- (注)
- 有効にすると、NTP 認証機能は設定済みのすべてのサーバでグローバルに機能します。
 - NTP サーバ認証では SHA1 のみがサポートされます。
 - サーバを認証するには、キー ID とキー値が必要です。キー ID は、メッセージダイジェストのコンピューティング時に、使用するキー値をクライアントとサーバの両方に指示するために使用されます。キー値は、`ntp-keygen` を使用して導出される固定値です。
-

手順

ステップ1 ntp 4.2.8p8 をダウンロードします。

ステップ2 NTP サーバを、**ntpd openssl** を有効にしてインストールします。

ステップ3 NTP キー ID とキー値を生成します。

ntp-keygen -M

これらの生成されたキーは、次の手順に使用します。

ステップ4 FXOS CLI から、NTP サーバを作成します。

create ntp-server *server_id*

ステップ5 NTP サーバを入力します。

scope ntp-server *server_id*

ステップ6 SHA1 キー ID を設定します。

set ntp-sha1-key-id *key_id*

ステップ7 SHA1 キー文字列を設定します。

set ntp-sha1-key-string *key_string*

ステップ8 NTP 認証を有効にします。

enable ntp-authentication

日時の設定

日付と時刻を手動で設定したり、現在のシステム時刻を表示するには、下記で説明するの CLI コマンドを使用してシステムのネットワーク タイム プロトコル (NTP) を設定します。

NTP の設定は、Firepower 4100/9300 シャーシとシャーシにインストールされている論理デバイス間で自動的に同期されます。



(注) Firepower 4100/9300 シャーシに Firepower Threat Defense を導入すると、スマートライセンスが正しく機能し、デバイス登録に適切なタイムスタンプを確保するように Firepower 4100/9300 シャーシに NTP を設定する必要があります。Firepower 4100/9300 シャーシと Firepower Management Center に同じ NTP サーバを使用する必要があります。

NTP を使用すると、[Current Time] タブの全体的な同期ステータスを表示できます。または、[Time Synchronization] タブの [NTP Server] テーブルの [Server Status] フィールドを見ると、設定済みの各 NTP サーバの同期ステータスを表示できます。システムが特定の NTP サーバと同期

できない場合、[Server Status]の横にある情報アイコンにカーソルを合わせると詳細を確認できます。

設定された日付と時刻の表示

手順

ステップ 1 FXOS CLI に接続します ([FXOS CLI へのアクセス](#)を参照)。

ステップ 2 設定されたタイムゾーンを表示する場合：

```
Firepower-chassis# show timezone
```

ステップ 3 設定された日付と時刻を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
Firepower-chassis# show clock
```

例

次の例では、設定されたタイムゾーンと現在のシステム日時を表示する方法を示しています。

```
Firepower-chassis# show timezone
Timezone: America/Chicago
Firepower-chassis# show clock
Thu Jun  2 12:40:42 CDT 2016
Firepower-chassis#
```

タイムゾーンの設定

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 タイムゾーンを設定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set timezone
```

この時点で、大陸、国、およびタイムゾーン領域に対応する番号を入力するように求められます。プロンプトごとに適切な情報を入力します。

ロケーション情報の指定を完了すると、プロンプトが表示され、正しいタイムゾーン情報が設定されているか確認するよう求められます。確認する場合は **1 (yes)** を入力し、操作をキャンセルする場合は **2 (no)** を入力します。

ステップ 4 設定されたタイムゾーンを表示するには：

```
Firepower-chassis /system/services # top
```

```
Firepower-chassis# show timezone
```

例

次に、太平洋標準時領域にタイムゾーンを設定し、トランザクションをコミットし、設定したタイムゾーンを表示する例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # set timezone
Please identify a location so that time zone rules can be set correctly.
Please select a continent or ocean.
1) Africa                4) Arctic Ocean        7) Australia            10) Pacific Ocean
2) Americas              5) Asia                8) Europe
3) Antarctica           6) Atlantic Ocean     9) Indian Ocean
#? 2
Please select a country.
1) Anguilla              28) Haiti
2) Antigua & Barbuda    29) Honduras
3) Argentina            30) Jamaica
4) Aruba                 31) Martinique
5) Bahamas              32) Mexico
6) Barbados             33) Montserrat
7) Belize               34) Nicaragua
8) Bolivia              35) Panama
9) Brazil               36) Paraguay
10) Canada               37) Peru
11) Caribbean Netherlands 38) Puerto Rico
12) Cayman Islands      39) St Barthelemy
13) Chile               40) St Kitts & Nevis
14) Colombia            41) St Lucia
15) Costa Rica          42) St Maarten (Dutch part)
16) Cuba                43) St Martin (French part)
17) Curacao             44) St Pierre & Miquelon
18) Dominica            45) St Vincent
19) Dominican Republic 46) Suriname
20) Ecuador             47) Trinidad & Tobago
21) El Salvador         48) Turks & Caicos Is
22) French Guiana       49) United States
23) Greenland           50) Uruguay
24) Grenada             51) Venezuela
25) Guadeloupe          52) Virgin Islands (UK)
26) Guatemala           53) Virgin Islands (US)
27) Guyana
#? 49
Please select one of the following time zone regions.
1) Eastern Time
2) Eastern Time - Michigan - most locations
3) Eastern Time - Kentucky - Louisville area
4) Eastern Time - Kentucky - Wayne County
```

```

5) Eastern Time - Indiana - most locations
6) Eastern Time - Indiana - Daviess, Dubois, Knox & Martin Counties
7) Eastern Time - Indiana - Pulaski County
8) Eastern Time - Indiana - Crawford County
9) Eastern Time - Indiana - Pike County
10) Eastern Time - Indiana - Switzerland County
11) Central Time
12) Central Time - Indiana - Perry County
13) Central Time - Indiana - Starke County
14) Central Time - Michigan - Dickinson, Gogebic, Iron & Menominee Counties
15) Central Time - North Dakota - Oliver County
16) Central Time - North Dakota - Morton County (except Mandan area)
17) Central Time - North Dakota - Mercer County
18) Mountain Time
19) Mountain Time - south Idaho & east Oregon
20) Mountain Standard Time - Arizona (except Navajo)
21) Pacific Time
22) Pacific Standard Time - Annette Island, Alaska
23) Alaska Time
24) Alaska Time - Alaska panhandle
25) Alaska Time - southeast Alaska panhandle
26) Alaska Time - Alaska panhandle neck
27) Alaska Time - west Alaska
28) Aleutian Islands
29) Hawaii
#? 21

```

The following information has been given:

```

United States
Pacific Time

```

```

Therefore timezone 'America/Los_Angeles' will be set.
Local time is now:      Wed Jun 24 07:39:25 PDT 2015.
Universal Time is now: Wed Jun 24 14:39:25 UTC 2015.
Is the above information OK?
1) Yes
2) No
#? 1
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services # top
Firepower-chassis# show timezone
Timezone: America/Los_Angeles (Pacific Time)
Firepower-chassis#

```

NTP を使用した日付と時刻の設定

NTP を利用して階層的なサーバシステムを実現し、ネットワーク システム間の時刻を正確に同期します。このような精度は、CRL の検証など正確なタイム スタンプを含む場合など、時刻が重要な操作で必要になります。最大 4 台の NTP サーバを設定できます。



(注) FXOS 2.2(2) 以降では NTP バージョン 3 を使用します。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 指定したホスト名、IPv4 または IPv6 アドレスの NTP サーバを使用するようにシステムを設定します。

```
Firepower-chassis /system/services # create ntp-server {hostname | ip-addr | ip6-addr}
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /system/services # commit-buffer
```

ステップ 5 すべての設定済み NTP サーバの同期ステータスを表示するには、次のようにします。

```
Firepower-chassis /system/services # show ntp-server
```

ステップ 6 特定の NTP サーバの同期ステータスを表示するには、次のようにします。

```
Firepower-chassis /system/services # scope ntp-server {hostname | ip-addr | ip6-addr}
```

```
Firepower-chassis /system/services/ntp-server # show detail
```

例

次の例では、IP アドレス 192.168.200.101 を持つ NTP サーバを設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # create ntp-server 192.168.200.101
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

次の例では、IPv6 アドレス 4001::6 を持つ NTP サーバを設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # create ntp-server 4001::6
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

NTP サーバの削除

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 指定したホスト名、IPv4 または IPv6 アドレスの NTP サーバを削除します。

```
Firepower-chassis /system/services # delete ntp-server {hostname | ip-addr | ip6-addr}
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /system/services # commit-buffer
```

例

次に、IP アドレス 192.168.200.101 の NTP サーバを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system  
Firepower-chassis /system # scope services  
Firepower-chassis /system/services # delete ntp-server 192.168.200.101  
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer  
Firepower-chassis /system/services #
```

次に、IPv6 アドレス 4001::6 の NTP サーバを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system  
Firepower-chassis /system # scope services  
Firepower-chassis /system/services # delete ntp-server 4001::6  
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer  
Firepower-chassis /system/services #
```

手動での日付と時刻の設定

ここでは、Firepower シャーシで日付と時刻を手動で設定する方法について説明します。システムクロックの変更はただちに反映されます。



(注) システムクロックが NTP サーバと同期中である場合は、日付と時刻を手動で設定することはできません。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 システム クロックを設定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set clock month day year hour min sec
```

month には、月の英名の最初の 3 文字を使用します。時間は 24 時間形式で入力する必要があります。午後 7 時は 19 になります。

システムクロックの変更はただちに反映されます。バッファをコミットする必要はありません。

例

次に、システムクロックを設定する例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # set clock jun 24 2015 15 27 00
Firepower-chassis /system/services #
```

SSH の設定

次の手順では、Firepower シャーシへの SSH アクセスを有効または無効にする方法、および FXOS シャーシを SSH クライアントとして有効にする方法について説明します。SSH はデフォルトでイネーブルになります。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis # scope system
```


ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 Firepower シャーシへの SSH アクセスを設定するには、次のいずれかを実行します。

- Firepower シャーシへの SSH アクセスを許可するには、次のコマンドを入力します。

```
Firepower-chassis /system/services # enable ssh-server
```

- Firepower シャーシへの SSH アクセスを禁止するには、次のコマンドを入力します。

```
Firepower-chassis /system/services # disable ssh-server
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower /system/services # commit-buffer
```

例

次の例では、Firepower シャーシへの SSH アクセスを有効化し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower# scope system  
Firepower /system # scope services  
Firepower /system/services # enable ssh-server  
Firepower /system/services* # commit-buffer  
Firepower /system/services #
```

TLS の設定

Transport Layer Security (TLS) プロトコルは、互いに通信する 2 つのアプリケーションの間でプライバシーとデータの整合性を確保します。FXOS シャーシと外部デバイスとの通信で許容する最小 TLS バージョンは、FXOS CLI を使用して設定できます。新しいバージョンの TLS では通信のセキュリティを強化できる一方、古いバージョンの TLS では古いアプリケーションとの後方互換性を維持できます。

たとえば、FXOS シャーシで設定されている最小 TLS バージョンが v1.1 の場合、クライアントブラウザが v1.0 だけを実行するように設定されていると、クライアントは HTTPS を使用して FXOS Chassis Manager との接続を開くことができません。したがって、ピアアプリケーションと LDAP サーバを適切に設定する必要があります。

次の手順で、FXOS シャーシと外部デバイス間の通信で許容する最小 TLS バージョンを設定、表示する方法を説明します。



- (注)
- FXOS 2.3(1) リリースの時点では、FXOS シャーシのデフォルト最小 TLS バージョンは v1.1 です。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システムで使用できる TLS バージョンのオプションを表示します。

```
Firepower-chassis /system # set services tls-ver
```

例 :

```
Firepower-chassis /system #
Firepower-chassis /system # set services tls-ver
    v1_0  v1.0
    v1_1  v1.1
    v1_2  v1.2
```

ステップ 3 最小 TLS バージョンを設定します。

```
Firepower-chassis /system # set services tls-ver version
```

例 :

```
Firepower-chassis /system #
Firepower-chassis /system # set services tls-ver v1_2
```

ステップ 4 設定をコミットします。

```
Firepower-chassis /system # commit-buffer
```

ステップ 5 システムで設定されている最小 TLS バージョンを表示します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

```
Firepower-chassis /system/services # show
```

例 :

```
Firepower-chassis /system/services # show
Name: ssh
    Admin State: Enabled
    Port: 22
Kex Algo: Diffie Hellman Group1 Sha1,Diffie Hellman Group14 Sha1
Mac Algo: Hmac Sha1,Hmac Sha1 96,Hmac Sha2 512,Hmac Sha2 256
Encrypt Algo: 3des Cbc,Aes256 Cbc,Aes128 Cbc,Aes192 Cbc,Aes256 Ctr,Aes128 Ctr,Aes192 Ctr
Auth Algo: Rsa
    Host Key Size: 2048
Volume: None Time: None
Name: telnet
    Admin State: Disabled
    Port: 23
Name: https
    Admin State: Enabled
    Port: 443
    Operational port: 443
    Key Ring: default
    Cipher suite mode: Medium Strength
    Cipher suite: ALL:!ADH:!EXPORT40:!EXPORT56:!LOW:!RC4:!MD5:!IDEA:+HIGH:+MEDIUM:+EXP:+eNULL
    Https authentication type: Cert Auth
    Crl mode: Relaxed
```

```
TLS:
  TLS version: v1.2
```

Telnet の設定

次の手順では、Firepower シャーシへの Telnet アクセスを有効化またはディセーブルにする方法について説明します。Telnet はデフォルトでディセーブルです。



(注) 現在は、CLI を使用した Telnet 設定のみ可能です。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis # scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 Firepower シャーシへの Telnet アクセスを設定するには、次のいずれかを実行します。

- Firepower シャーシへの Telnet アクセスを許可するには、次のコマンドを入力します。

```
Firepower-chassis /system/services # enable telnet-server
```

- Firepower シャーシへの Telnet アクセスを禁止するには、次のコマンドを入力します。

```
Firepower-chassis /system/services # disable telnet-server
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower /system/services # commit-buffer
```

例

次に、Telnet を有効にし、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /services # enable telnet-server
Firepower-chassis /services* # commit-buffer
Firepower-chassis /services #
```

SNMP の設定

このセクションでは、Firepower シャーシに簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) を設定する方法を説明します。詳細については、次のトピックを参照してください。

SNMP の概要

簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) は、SNMP マネージャとエージェント間の通信用メッセージフォーマットを提供する、アプリケーションレイヤプロトコルです。SNMP では、ネットワーク内のデバイスのモニタリングと管理に使用する標準フレームワークと共通言語が提供されます。

SNMP フレームワークは 3 つの部分で構成されます。

- SNMP マネージャ : SNMP を使用してネットワークデバイスのアクティビティを制御し、モニタリングするシステム。
- SNMP エージェント : Firepower シャーシ内のソフトウェア コンポーネントで、Firepower シャーシのデータを維持し、必要に応じてそのデータを SNMP マネージャに送信します。Firepower シャーシには、エージェントと一連の MIB が含まれています。SNMP エージェントを有効にし、マネージャとエージェント間のリレーションシップを作成するには、Firepower Chassis Manager または FXOS CLI で SNMP を有効にし、設定します。
- 管理情報ベース (MIB) : SNMP エージェント上の管理対象オブジェクトのコレクション。

Firepower シャーシは、SNMPv1、SNMPv2c、および SNMPv3 をサポートします。SNMPv1 および SNMPv2c はどちらも、コミュニティベース形式のセキュリティを使用します。SNMP は次のように定義されています。

- RFC 3410 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3410>)
- RFC 3411 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3411>)
- RFC 3412 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3412>)
- RFC 3413 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3413>)
- RFC 3414 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3414>)
- RFC 3415 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3415>)
- RFC 3416 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3416>)
- RFC 3417 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3417>)
- RFC 3418 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3418>)
- RFC 3584 (<http://tools.ietf.org/html/rfc3584>)

SNMP 通知

SNMP の重要な機能の 1 つは、SNMP エージェントから通知を生成できることです。これらの通知では、要求を SNMP マネージャから送信する必要はありません。通知は、不正なユーザ認証、再起動、接続の切断、隣接ルータとの接続の切断、その他の重要なイベントを表示します。

Firepower シャーシは、トラップまたはインフォームとして SNMP 通知を生成します。SNMP マネージャはトラップ受信時に確認応答を送信せず、Firepower シャーシはトラップが受信されたかどうかを確認できないため、トラップの信頼性はインフォームよりも低くなります。インフォーム要求を受信する SNMP マネージャは、SNMP 応答プロトコルデータユニット (PDU) でメッセージの受信を確認応答します。Firepower シャーシが PDU を受信しない場合、インフォーム要求を再送できます。

SNMP セキュリティ レベルおよび権限

SNMPv1、SNMPv2c、および SNMPv3 はそれぞれ別のセキュリティモデルを表します。セキュリティモデルは選択されたセキュリティレベルと組み合わせられ、SNMP メッセージの処理中に適用されるセキュリティメカニズムを決定します。

セキュリティレベルは、SNMP トラップに関連付けられているメッセージを表示するために必要な特権を決定します。権限レベルは、開示されないようメッセージを保護する必要があるか、またはメッセージを認証する必要があるかどうかを決定します。サポートされるセキュリティレベルは、セキュリティモデルが設定されているかによって異なります。SNMP セキュリティレベルは、次の権限の 1 つ以上をサポートします。

- [noAuthNoPriv] : 認証なし、暗号化なし
- [authNoPriv] : 認証あり、暗号化なし
- [authPriv] : 認証あり、暗号化あり

SNMPv3 では、セキュリティモデルとセキュリティレベルの両方が提供されています。セキュリティモデルは、ユーザおよびユーザが属するロールを設定する認証方式です。セキュリティレベルとは、セキュリティモデル内で許可されるセキュリティのレベルです。セキュリティモデルとセキュリティレベルの組み合わせにより、SNMP パケット処理中に採用されるセキュリティメカニズムが決まります。

SNMP セキュリティモデルとレベルのサポートされている組み合わせ

次の表に、セキュリティモデルとレベルの組み合わせの意味を示します。

表 1: SNMP セキュリティ モデルおよびセキュリティ レベル

モデル	レベル	認証	暗号化	結果
v1	noAuthNoPriv	コミュニティストリング	未対応	コミュニティストリングの照合を使用して認証します。
v2c	noAuthNoPriv	コミュニティストリング	未対応	コミュニティストリングの照合を使用して認証します。
v3	noAuthNoPriv	ユーザ名	未対応	ユーザ名の照合を使用して認証します。
v3	authNoPriv	HMAC-SHA	なし	HMAC Secure Hash Algorithm (SHA) に基づいて認証します。
v3	authPriv	HMAC-SHA	DES	HMAC-SHA アルゴリズムに基づいて認証します。データ暗号規格 (DES) の 56 ビット暗号化、および暗号ブロック連鎖 (CBC) DES (DES-56) 標準に基づいた認証を提供します。

SNMPv3 セキュリティ機能

SNMPv3 は、ネットワーク経由のフレームの認証と暗号化を組み合わせることによって、デバイスへのセキュアアクセスを実現します。SNMPv3 は、設定済みユーザによる管理動作のみを許可し、SNMP メッセージを暗号化します。SNMPv3 ユーザベースセキュリティモデル (USM) は SNMP メッセージレベルセキュリティを参照し、次のサービスを提供します。

- **メッセージの完全性**：メッセージが不正な方法で変更または破壊されていないことを保証します。また、データシーケンスが、通常発生するものよりも高い頻度で変更されていないことを保証します。
- **メッセージ発信元の認証**：受信データを発信したユーザのアイデンティティが確認されたことを保証します。
- **メッセージの機密性および暗号化**：不正なユーザ、エンティティ、プロセスに対して情報を利用不可にしたり開示しないようにします。

SNMP サポート

Firepower シャーシは SNMP の次のサポートを提供します。

MIB のサポート

Firepower シャーシは MIB への読み取り専用アクセスをサポートします。

利用可能な特定の MIB の詳細とその入手場所については、『[Cisco FXOS MIB Reference Guide](#)』を参照してください。

SNMPv3 ユーザの認証プロトコル

Firepower シャーシは、SNMPv3 ユーザの HMAC-SHA-96 (SHA) 認証プロトコルをサポートします。

SNMPv3 ユーザの AES プライバシー プロトコル

Firepower シャーシは、SNMPv3 メッセージ暗号化用のプライバシー プロトコルの 1 つとして Advanced Encryption Standard (AES) を使用し、RFC 3826 に準拠しています。

プライバシーパスワード (priv オプション) では、SNMP セキュリティ暗号化方式として DES または 128 ビット AES を選択できます。AES-128 の設定を有効化して、SNMPv3 ユーザのプライバシーパスワードを含めると、Firepower シャーシはそのプライバシーパスワードを使用して 128 ビット AES キーを生成します。AES プライバシーパスワードは最小で 8 文字です。パスフレーズをクリアテキストで指定する場合、最大 64 文字を指定できます。

SNMP のイネーブル化および SNMP プロパティの設定

手順

ステップ 1 モニタリング モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
```

ステップ 2 SNMP をイネーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
```

ステップ 3 SNMP コミュニティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis /monitoring # set snmp community
```

set snmp community コマンドを入力すると、SNMP コミュニティの入力を求められます。

ステップ 4 SNMP コミュニティを指定します。パスワードとしてコミュニティ名を使用します。コミュニティ名は、最大 32 文字の英数字で指定できます。

```
Firepower-chassis /monitoring # Enter a snmp community: community-name
```

ステップ 5 SNMP 担当者のシステムの連絡先を指定します。システムの連絡先名 (電子メールアドレスや、名前と電話番号など) は、最大 255 文字の英数字で指定できます。

```
Firepower-chassis /monitoring # set snmp syscontact system-contact-name
```

ステップ 6 SNMP エージェント (サーバ) が実行されるホストの場所を指定します。システムロケーション名は、最大 512 文字の英数字で指定できます。

```
Firepower-chassis /monitoring # set snmp syslocation system-location-name
```

ステップ 7 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring # commit-buffer
```

例

次に、SNMP をイネーブルにし、SnmpCommSystem2 という名前の SNMP コミュニティを設定し、contactperson という名前のシステム連絡先を設定し、systemlocation という名前の連絡先ロケーションを設定し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
Firepower-chassis /monitoring* # set snmp community
Enter a snmp community: SnmpCommSystem2
Firepower-chassis /monitoring* # set snmp syscontact contactperson1
Firepower-chassis /monitoring* # set snmp syslocation systemlocation
Firepower-chassis /monitoring* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring #
```

次のタスク

SNMP トラップおよびユーザを作成します。

SNMP トラップの作成

手順

ステップ 1 モニタリング モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
```

ステップ 2 SNMP をイネーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
```

ステップ 3 指定したホスト名、IPv4 アドレス、または IPv6 アドレスで SNMP トラップを作成します。

```
Firepower-chassis /monitoring # create snmp-trap {hostname | ip-addr | ip6-addr}
```

ステップ 4 SNMP トラップに使用する SNMP コミュニティ名を指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # set community community-name
```

ステップ 5 SNMP トラップに使用するポートを指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # set port port-num
```

ステップ 6 トラップに使用する SNMP のバージョンとモデルを指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # set version {v1 | v2c | v3}
```


ステップ7 (任意) 送信するトラップのタイプを指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # set notificationtype {traps | informs}
```

ここに表示される値は次のとおりです。

- バージョンで v2c または v3 を選択した場合は **traps**。
- バージョンで v2c を選択した場合は **informs**。

(注) バージョンで v2c を選択した場合にのみインフォーム通知を送信できます。

ステップ8 (任意) バージョンで v3 を選択した場合は、トラップに関連付ける権限を指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # set v3privilege {auth | noauth | priv}
```

ここに表示される値は次のとおりです。

- **auth** : 認証あり、暗号化なし
- **noauth** : 認証なし、暗号化なし
- **priv** : 認証あり、暗号化あり

ステップ9 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap # commit-buffer
```

例

次の例は、SNMP をイネーブルにし、IPv4 アドレスを使用して SNMP トラップを作成し、トラップがポート 2 で SnmpCommSystem2 コミュニティを使用するよう指定し、バージョンを v3 に設定し、通知タイプを traps に設定し、v3 権限を priv に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
Firepower-chassis /monitoring* # create snmp-trap 192.168.100.112
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set community SnmpCommSystem2
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set port 2
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set version v3
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set notificationtype traps
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set v3privilege priv
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap #
```

次の例は、SNMP をイネーブルにし、IPv6 アドレスを使用して SNMP トラップを作成し、トラップがポート 2 で SnmpCommSystem3 コミュニティを使用するよう指定し、バージョンを v3 に設定し、通知タイプを traps に設定し、v3 権限を priv に設定し、トランザクションをコミットします。

```

Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
Firepower-chassis /monitoring* # create snmp-trap 2001::1
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set community SnmpCommSystem3
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set port 2
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set version v3
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set notificationtype traps
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # set v3privilege priv
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring/snmp-trap #

```

SNMP トラップの削除

手順

ステップ 1 モニタリング モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
```

ステップ 2 指定したホスト名または IP アドレスの SNMP トラップを削除します。

```
Firepower-chassis /monitoring # delete snmp-trap {hostname | ip-addr}
```

ステップ 3 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring # commit-buffer
```

例

次に、IP アドレス 192.168.100.112 で SNMP トラップを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```

Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # delete snmp-trap 192.168.100.112
Firepower-chassis /monitoring* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring #

```

SNMPv3 ユーザの作成

手順

ステップ 1 モニタリング モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
```

ステップ 2 SNMP をイネーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
```

ステップ3 指定した SNMPv3 ユーザを作成します。

```
Firepower-chassis /monitoring # create snmp-user user-name
```

create snmp-user コマンドを入力すると、パスワードの入力を促すプロンプトが表示されます。

Firepower eXtensible Operating System では、次の要件を満たさないパスワードは拒否されます。

- 8 ～ 80 文字を含む。
- 含められるのは、文字、数字、および次の文字のみです。
~!@#%^&*()_+{}[]\;'"<>./
- 次の記号を含まない。\$（ドル記号）、?（疑問符）、「=」（等号）は除きます。
- 5 つ以上の異なる文字を含める必要があります。
- 連続するインクリメントまたはデクリメントの数字または文字をたくさん含めないでください。たとえば、「12345」は 4 つ、「ZYXW」は 3 つ文字列が続いています。このような文字の合計数が特定の制限を超えると（通常は約 4 ～ 6 回発生）、簡素化チェックに失敗します。

（注） 連続するインクリメントまたはデクリメント文字列の間に連続しないインクリメントまたはデクリメント文字列が含まれても、文字数はリセットされません。たとえば、abcd&!21 はパスワードチェックに失敗しますが、abcd&125, は失敗しません。

ステップ4 AES-128 暗号化の使用を有効化またはディセーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user # set aes-128 {no | yes}
```

デフォルトでは、AES-128 暗号化はディセーブルになっています。

ステップ5 ユーザ プライバシー パスワードを指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user # set priv-password
```

set priv-password コマンドを入力すると、プライバシー パスワードの入力と確認を促すプロンプトが表示されます。

Firepower eXtensible Operating System では、次の要件を満たさないパスワードは拒否されます。

- 8 ～ 80 文字を含む。
- 含められるのは、文字、数字、および次の文字のみです。
~!@#%^&*()_+{}[]\;'"<>./
- 次の記号を含まない。\$（ドル記号）、?（疑問符）、「=」（等号）は除きます。
- 5 つ以上の異なる文字を含める必要があります。
- 連続するインクリメントまたはデクリメントの数字または文字をたくさん含めないでください。たとえば、「12345」は 4 つ、「ZYXW」は 3 つ文字列が続いています。このよう

な文字の合計数が特定の制限を超えると（通常は約4～6回発生）、簡素化チェックに失敗します。

(注) 連続するインクリメントまたはデクリメント文字列の間に連続しないインクリメントまたはデクリメント文字列が含まれても、文字数はリセットされません。たとえば、`abcd&!21` はパスワードチェックに失敗しますが、`abcd&!25` は失敗しません。

ステップ6 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user # commit-buffer
```

例

次の例では、SNMPを有効化し、`snmp-user14` という名前のSNMPv3ユーザを作成し、AES-128暗号化を有効化し、パスワードおよびプライバシーパスワードを設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # enable snmp
Firepower-chassis /monitoring* # create snmp-user snmp-user14
Password:
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user* # set aes-128 yes
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user* # set priv-password
Enter a password:
Confirm the password:
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring/snmp-user #
```

SNMPv3 ユーザの削除

手順

ステップ1 モニタリングモードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
```

ステップ2 指定したSNMPv3ユーザを削除します。

```
Firepower-chassis /monitoring # delete snmp-user user-name
```

ステップ3 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring # commit-buffer
```

例

次に、snmpuser14 という名前の SNMPv3 ユーザを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # delete snmp-user snmp-user14
Firepower-chassis /monitoring* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring #
```

HTTPS の設定

ここでは、Firepower 4100/9300 シャーシで HTTPS を設定する方法を説明します。



(注) Firepower Chassis Manager または FXOS CLI を使用して HTTPS ポートを変更できます。他の HTTPS の設定はすべて、FXOS CLI を使用してのみ設定できます。

証明書、キーリング、トラストポイント

HTTPS は、公開キー インフラストラクチャ (PKI) を使用してクライアントのブラウザと Firepower 4100/9300 シャーシなどの 2 つのデバイス間でセキュアな通信を確立します。

暗号キーとキーリング

各 PKI デバイスは、内部キーリングに非対称の Rivest-Shamir-Adleman (RSA) 暗号キーのペア (1 つはプライベート、もう 1 つはパブリック) を保持します。いずれかのキーで暗号化されたメッセージは、もう一方のキーで復号化できます。暗号化されたメッセージを送信する場合、送信者は受信者の公開キーで暗号化し、受信者は独自の秘密キーを使用してメッセージを復号化します。送信者は、独自の秘密キーで既知のメッセージを暗号化 (「署名」とも呼ばれます) して公開キーの所有者を証明することもできます。受信者が該当する公開キーを使用してメッセージを正常に復号化できる場合は、送信者が対応する秘密キーを所有していることが証明されます。暗号キーの長さはさまざまであり、通常の場合は 512 ビット ~ 2048 ビットです。通常、長いキーは短いキーよりも安全です。FXOS では最初に 2048 ビットのキーペアを含むデフォルトのキーリングが提供されます。そして、追加のキーリングを作成できます。

クラスタ名が変更されたり、証明書が期限切れになったりした場合は、デフォルトのキーリング証明書を手動で再生成する必要があります。

証明書

セキュアな通信を準備するには、まず 2 つのデバイスがそれぞれのデジタル証明書を交換します。証明書は、デバイスの ID に関する署名済み情報とともにデバイスの公開キーを含むファイルです。暗号化された通信をサポートするために、デバイスは独自のキーペアと独自の自己

署名証明書を生成できます。リモートユーザが自己署名証明書を提示するデバイスに接続する場合、ユーザはデバイスの ID を簡単に検証することができず、ユーザのブラウザは最初に認証に関する警告を表示します。デフォルトでは、FXOS にはデフォルトのキーリングからの公開キーを含む組み込みの自己署名証明書が含まれます。

トラストポイント

FXOS に強力な認証を提供するために、デバイスの ID を証明する信頼できるソース（つまり、トラストポイント）からサードパーティ証明書を取得し、インストールできます。サードパーティ証明書は、発行元トラストポイント（ルート認証局（CA）、中間 CA、またはルート CA につながるトラストチェーンの一部となるトラストアンカーのいずれか）によって署名されます。新しい証明書を取得するには、FXOS で証明書要求を生成し、トラストポイントに要求を送信する必要があります。



重要 証明書は、Base64 エンコード X.509（CER）フォーマットである必要があります。

キーリングの作成

FXOS は、デフォルト キーリングを含め、最大 8 個のキーリングをサポートします。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 キーリングを作成し、名前を付けます。

```
Firepower-chassis # create keyring keyring-name
```

ステップ 3 SSL キーのビット長を設定します。

```
Firepower-chassis # set modulus {mod1024 | mod1536 | mod2048 | mod512}
```

ステップ 4 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis # commit-buffer
```

例

次の例は、1024 ビットのキー サイズのキーリングを作成します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # create keyring kr220
Firepower-chassis /security/keyring* # set modulus mod1024
```

```
Firepower-chassis /security/keyring* # commit-buffer  
Firepower-chassis /security/keyring #
```

次のタスク

このキー リングの証明書要求を作成します。

デフォルト キー リングの再生成

クラスタ名が変更されたり、証明書が期限切れになったりした場合は、デフォルトのキーリング証明書を手動で再生成する必要があります。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 デフォルト キー リングでキー リング セキュリティ モードに入ります。

```
Firepower-chassis /security # scope keyring default
```

ステップ 3 デフォルト キー リングを再生成します。

```
Firepower-chassis /security/keyring # set regenerate yes
```

ステップ 4 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis # commit-buffer
```

例

次に、デフォルト キー リングを再生成する例を示します。

```
Firepower-chassis# scope security  
Firepower-chassis /security # scope keyring default  
Firepower-chassis /security/keyring* # set regenerate yes  
Firepower-chassis /security/keyring* # commit-buffer  
Firepower-chassis /security/keyring #
```

キーリングの証明書要求の作成

基本オプション付きのキーリングの証明書要求の作成

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 キーリングのコンフィギュレーション モードに入ります。

```
Firepower-chassis /security # scope keyring keyring-name
```

ステップ 3 指定された IPv4 または IPv6 アドレス、またはファブリック インターコネクトの名前を使用して証明書要求を作成します。証明書要求のパスワードを入力するように求められます。

```
Firepower-chassis /security/keyring # create certreq {ip [ipv4-addr | ipv6-v6] | subject-name name}
```

ステップ 4 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /security/keyring/certreq # commit-buffer
```

ステップ 5 コピーしてトラストアンカーまたは認証局に送信可能な証明書要求を表示します。

```
Firepower-chassis /security/keyring # show certreq
```

例

次の例では、基本オプション付きのキーリングについて IPv4 アドレスで証明書要求を作成して表示します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope keyring kr220
Firepower-chassis /security/keyring # create certreq ip 192.168.200.123 subject-name sjc04
Certificate request password:
Confirm certificate request password:
Firepower-chassis /security/keyring* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/keyring # show certreq
Certificate request subject name: sjc04
Certificate request ip address: 192.168.200.123
Certificate request e-mail name:
Certificate request country name:
State, province or county (full name):
Locality (eg, city):
Organization name (eg, company):
Organization Unit name (eg, section):
Request:
-----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
MIIBfTCB5wIBADARMQ8wDQYDVQQDEWZzYW1jMDQwZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQAD
gY0AMIGJJAoGBALpKnlt8qMZO4UGqILKFXQQc2c8b/vW2rnRF80PhKbhghLA1YZ1F
JqcYEG5Yl1+vgohLBTd45s0GC8m4RTLJWHO4SwccAUXQ5Zngf45YtX1Wsy1wUWV4
```



```

Ore/zgTk/WCd56RfOBvWR2Dtztu2pGA14sd761zLxt29K7R8mzj6CAUVAgMBAAGg
LTArBgkqhkiG9w0BCQ4xHjAcMBoGA1UdEQEB/wQQMA6CBnNhbWMwNIcECsEiXjAN
BgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQCsxN0qUHYGFoQw56RwQueLTNPnrndqUwuZHU003Teg
nhsyu4satpyiPqVV9viKZ+spvc6x5PWICTWgHhH8BimOb/0OKuG8kwfIGGsEDlAV
TTYvUP+BZ9OFiPbRIA718S+V8ndXr1HejiQGx1DNqoN+odCXpc5kjoXD01ZTL09H
BA==
-----END CERTIFICATE REQUEST-----

```

```
Firepower-chassis /security/keyring #
```

次のタスク

- 証明書要求のテキストを BEGIN および END 行を含めてコピーし、ファイルに保存します。キーリングの証明書を取得するため、証明書要求を含むファイルをトラストアンカーまたは認証局に送信します。
- トラスト ポイントを作成し、トラスト アンカーから受け取ったトラストの証明書の証明書チェーンを設定します。

詳細オプション付きのキーリングの証明書要求の作成

手順

-
- ステップ 1** セキュリティ モードを開始します。
Firepower-chassis # **scope security**
- ステップ 2** キーリングのコンフィギュレーション モードに入ります。
Firepower-chassis /security # **scope keyring keyring-name**
- ステップ 3** 証明書要求を作成します。
Firepower-chassis /security/keyring # **create certreq**
- ステップ 4** 会社が存在している国の国コードを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set country country name**
- ステップ 5** 要求に関連付けられたドメイン ネーム サーバ (DNS) アドレスを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set dns DNS Name**
- ステップ 6** 証明書要求に関連付けられた電子メールアドレスを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set e-mail E-mail name**
- ステップ 7** Firepower 4100/9300 シャーシの IP アドレスを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set ip {certificate request ip-address|certificate request ip6-address }**
- ステップ 8** 証明書を要求している会社の本社が存在する市または町を指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set locality locality name (eg, city)**

- ステップ 9** 証明書を要求している組織を指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set org-name** *organization name*
- ステップ 10** 組織ユニットを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set org-unit-name** *organizational unit name*
- ステップ 11** 証明書要求に関するオプションのパスワードを指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set password** *certificate request password*
- ステップ 12** 証明書を要求している会社の本社が存在する州または行政区分を指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set state** *state, province or county*
- ステップ 13** Firepower 4100/9300 シャーシの完全修飾ドメイン名を指定します。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # **set subject-name** *certificate request name*
- ステップ 14** トランザクションをコミットします。
Firepower-chassis /security/keyring/certreq # **commit-buffer**
- ステップ 15** コピーしてトラストアンカーまたは認証局に送信可能な証明書要求を表示します。
Firepower-chassis /security/keyring # **show certreq**

例

次の例では、詳細オプション付きのキーリングについてIPv4アドレスで証明書要求を作成して表示します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope keyring kr220
Firepower-chassis /security/keyring # create certreq
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set ip 192.168.200.123
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set subject-name sjc04
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set country US
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set dns bgl-samc-15A
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set email test@cisco.com
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set locality new york city
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set org-name "Cisco Systems"
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set org-unit-name Testing
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # set state new york
Firepower-chassis /security/keyring/certreq* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/keyring/certreq # show certreq
Certificate request subject name: sjc04
Certificate request ip address: 192.168.200.123
Certificate request e-mail name: test@cisco.com
Certificate request country name: US
State, province or county (full name): New York
Locality name (eg, city): new york city
Organization name (eg, company): Cisco
Organization Unit name (eg, section): Testing
Request:
-----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
MIIBfTCB5wIBADARMQ8wDQYDVQQDEwZzYW1jMDQwZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQAD
```

```
gY0AMIGJAoGBALpKn1t8qMZO4UGqILKFXQQc2c8b/vW2rnRF8OPhKbhghLA1YZ1F
JqcYEG5Y1l+vgohLBTd45s0GC8m4RTLJWHO4SwccAUXQ5Zngf45YtX1WsywUWV4
0re/zgTk/WCd56RfOBvWR2Dtztu2pGA14sd761zLxt29K7R8mzj6CAUVAgMBAAGg
LTArBgkqhkiG9w0BCQ4xHjAcMBoGA1UdEQEB/wQMA6CBnNhbWMwNlcECsEiXjAN
BgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQCsxN0qUHYGFoQw56RwQueLTNPnrndqUwuZHU003Teg
nhsyu4satpyiPqVV9viKZ+spvc6x5PWICtWgHh8BimOb/0OKuG8kwfIGGsED1Av
TTYvUP+BZ9OFiPbRIA718S+V8ndXr1HejiQGx1DNqoN+odCXpc5kjoXD01zTL09H
BA==
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
```

```
Firepower-chassis /security/keyring/certreq #
```

次のタスク

- 証明書要求のテキストを **BEGIN** および **END** 行を含めてコピーし、ファイルに保存します。キーリングの証明書を取得するため、証明書要求を含むファイルをトラストアンカーまたは認証局に送信します。
- トラスト ポイントを作成し、トラスト アンカーから受け取ったトラストの証明書の証明書チェーンを設定します。

トラスト ポイントの作成

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 トラストポイントを作成します。

```
Firepower-chassis /security # create trustpoint name
```

ステップ 3 このトラスト ポイントの証明書情報を指定します。

```
Firepower-chassis /security/trustpoint # set certchain [certchain]
```

コマンドで証明書情報を指定しない場合、ルート認証局 (CA) への認証パスを定義するトラスト ポイントのリストまたは証明書を入力するように求められます。入力内容の次の行に、**ENDOFBUF** と入力して終了します。

重要 証明書は、Base64 エンコード X.509 (CER) フォーマットである必要があります。

ステップ 4 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /security/trustpoint # commit-buffer
```

例

次の例は、トラストポイントを作成し、トラストポイントに証明書を提供します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # create trustpoint tPoint10
Firepower-chassis /security/trustpoint* # set certchain
Enter lines one at a time. Enter ENDOFBUF to finish. Press ^C to abort.
Trustpoint Certificate Chain:
> -----BEGIN CERTIFICATE-----
> MIIDMDCCApmgAwIBAgIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFADB0MQswCQYDVQQGEwJVUzEL
> BxMMU2FuIEpvc2UsIENBMRUwEwYDVQQKEwxFeGFtcGx1IEluYy4xEzARBGNVBAsT
> C1Rlc3Qgr3JvdXAxGTAXBgNVBAMTEHRlc3QuZXhhbXBsZS5jb20xHzAdBgkqhkiG
> 9w0BCQEWEHVzZXJAZXhhbXBsZS5jb20wgZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQADgY0AMIGJ
> AoGBAMZw4nTepNIDhvzb0j7Z2Je4xAG56zmSHRMQeOGHemdh66u2/XAoLx7YcCYU
> ZgAMivyCsKgb/6CjQtsofvtrmC/eAehuK3/SINv7wd6Vv2pBt6ZpXgD4VBNKOND1
> GmbkPayVlQjbg4MD2dx2+H8EH3LMtdZrgKvPxPTE+bf5wZVNAgMBAAGgJTAjBgkq
> hkiG9w0BCQcxFhMUQSBjaGFsbGVuZ2UgcGFzc3dvcmQwDQYJKoZIhvcNAQEFBQAD
> gYEAG61CaJoJaVMhzC190306Mg51zq1zXcz75+VFj2I6rH9asckClD3mkOVx5gJU
> Ptt5CVQpNgNLdvbDPSsXretysOhqHmp9+CLv8FDuy1CDYfuaLtv1WvfhevskV0j6
> jtcEMYZ+f7+3yh421ido3n04MIGeBgNVHSMegZYwgZOAFL1NjtcEMYZ+f7+3yh42
> lido3n04oXikdjb0MQswCQYDVQQGEwJVUzELMAkGA1UECBMCQ0ExFDASBgNVBAct
> C1NhbnRhIENsYXJhMRswGQYDVQQKEwJ0dW92YSBTeXN0ZW1zIEluYy4xEzARBGNV
> BAsTC0VuZ21uZWVyaW5nMQ8wDQYDVQQDEwZ0ZXN0Q0GCAQAwdAYDVR0TBAUwAwEB
> /zANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQAhWaRwXNR6B4g6Lsnr+fptHv+VVhB5fKqGQqXc
> wR4pYiO4z42/j9Ijjenh75tCKMhW51az8copP1EBmOcyuhf5C6vasrenn1ddkkYt4
> PR0vxGc40whuiozBolesmsmjBbedUCwQgdFDWhDIzJwK5+N3x/kfa2EHU6id1avt
> 4YL5Jg==
> -----END CERTIFICATE-----
> ENDOFBUF
Firepower-chassis /security/trustpoint* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/trustpoint #
```

次のタスク

トラストアンカーまたは認証局からキーリング証明書を取得し、キーリングにインポートします。

キーリングへの証明書のインポート

始める前に

- キーリング証明書の証明書チェーンを含むトラストポイントを設定します。
- トラストアンカーまたは認証局からキーリング証明書を取得します。

手順

ステップ 1 セキュリティモードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 証明書を受け取るキーリングでコンフィギュレーションモードに入ります。

```
Firepower-chassis /security # scope keyring keyring-name
```

- ステップ 3** キーリング証明書の取得元のトラストアンカーまたは認証局に対しトラストポイントを指定します。

```
Firepower-chassis /security/keyring # set trustpoint name
```

- ステップ 4** キーリング証明書を入力してアップロードするためのダイアログを起動します。

```
Firepower-chassis /security/keyring # set cert
```

プロンプトで、トラストアンカーまたは認証局から受け取った証明書のテキストを貼り付けます。証明書の次の行に **ENDOFBUF** と入力して、証明書の入力を完了します。

重要 証明書は、Base64 エンコード X.509 (CER) フォーマットである必要があります。

- ステップ 5** トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /security/keyring # commit-buffer
```

例

次に、トラストポイントを指定し、証明書をキーリングにインポートする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope keyring kr220
Firepower-chassis /security/keyring # set trustpoint tPoint10
Firepower-chassis /security/keyring* # set cert
Enter lines one at a time. Enter ENDOFBUF to finish. Press ^C to abort.
Keyring certificate:
> -----BEGIN CERTIFICATE-----
> MIIB/zCCAWgCAQAwZkxCzAJBgNVBAYTA1VMTQswCQYDVQQIEwJDQTEVMBMGA1UE
> BxMMU2FuIEpvc2UsIENBMRUwEwYDVQQKEwxFeGFtcGx1IEluYy4xEzARBgNVBASt
> CLRlc3QgR3JvdXAxGTAXBgNVBAMTEHRlc3QuZXhhbXBsZS5jb20xHzAdBgkqhkiG
> 9w0BCQEWEHVzZXJAZXhhbXBsZS5jb20wgZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQADgY0AMIGJ
> AoGBAMZw4nTepNIDhVzb0j7Z2Je4xAG56zmSHRMQeOGHemdh66u2/XAoLx7YCcYU
> ZgAMivyCsKgb/6CjQtsofvtrmC/eAehuK3/SINv7wd6Vv2pBt6ZpXgD4VBKOND1
> GMbkPayV1QjbG4MD2dx2+H8EH3LmtdZrgKvPxPTE+bf5wZVNAGMBAAGgJTAjBqkq
> hkiG9w0BCQcxFhMUQSBjaGFsbGVuZ2UgcGFzc3dvcmQwDQYJKoZIhvcNAQEFBQAD
> gYEAG61CaJoJaVMhzC190306Mg51zq1zXcz75+VFj2I6rH9asckC1d3mkOVx5gJU
> Ptt5CVQpNgNLdvbDPSsXretysOhqHmp9+CLv8FDuy1CDYfuaLtlv1Wvfhevskv0j6
> mK3Ku+YiORnv6DhxrOoqau8r/hyI/L4317IPN1HhOi3oha4=
> -----END CERTIFICATE-----
> ENDOFBUF
Firepower-chassis /security/keyring* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/keyring #
```

次のタスク

キーリングを使用して HTTPS サービスを設定します。

HTTPS の設定



注意 HTTPS で使用するポートとキーリングの変更を含め、HTTPS の設定を完了した後、トランザクションを保存またはコミットするとすぐに、現在のすべての HTTP および HTTPS セッションは警告なく閉じられます。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 HTTPS サービスを有効にします。

```
Firepower-chassis /system/services # enable https
```

ステップ 4 (任意) HTTPS 接続で使用されるポートを指定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set https port port-num
```

ステップ 5 (任意) HTTPS に対して作成したキーリングの名前を指定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set https keyring keyring-name
```

ステップ 6 (任意) ドメインで使用される暗号スイートセキュリティのレベルを指定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set https cipher-suite-mode cipher-suite-mode
```

cipher-suite-mode には、以下のいずれかのキーワードを指定できます。

- **high-strength**
- **medium-strength**
- **low-strength**
- **custom** : ユーザ定義の暗号スイート仕様の文字列を指定できます。

ステップ 7 (任意) **cipher-suite-mode** が **custom** に設定されている場合は、ドメインに対してカスタムレベルの暗号スイートセキュリティを指定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set https cipher-suite cipher-suite-spec-string
```

cipher-suite-spec-string は最大 256 文字で構成できます。これは OpenSSL 暗号スイート仕様に準拠する必要があります。次を除き、スペースや特殊文字は使用できません。!(感嘆符)、+(プラス記号)、-(ハイフン)、および:(コロン)。詳細については、http://httpd.apache.org/docs/2.0/mod/mod_ssl.html#sslcipher-suite を参照してください。

たとえば、FXOS がデフォルトとして使用中強度仕様の文字列は次のようになります。
ALL:!ADH:!EXPORT56:!LOW:RC4+RSA:+HIGH:+MEDIUM:+EXP:+eNULL

(注) **cipher-suite-mode** は **custom** 以外に設定されている場合、このオプションは無視されます。

ステップ 8 (任意) 証明書失効リスト検査を、有効または無効にします。

```
set revoke-policy { relaxed | strict }
```

ステップ 9 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /system/services # commit-buffer
```

例

次の例では、HTTPS をイネーブルにし、ポート番号を 443 に設定し、キーリング名を **kring7984** に設定し、暗号スイートのセキュリティレベルを **[high]** に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # enable https
Firepower-chassis /system/services* # set https port 443
Warning: When committed, this closes all the web sessions.
Firepower-chassis /system/services* # set https keyring kring7984
Firepower-chassis /system/services* # set https cipher-suite-mode high
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

HTTPS ポートの変更

HTTPS サービスは、デフォルトでポート 443 で有効化になります。HTTPS をディisable することはできませんが、HTTPS 接続に使用するポートは変更できます。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis # scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 HTTPS 接続に使用するポートを指定します。

```
Firepower-chassis /system/services # set https port port-number
```

port-number には 1 ~ 65535 の整数を指定します。HTTPS は、デフォルトでポート 443 で有効化になります。

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower /system/services # commit-buffer
```

HTTPS ポートを変更すると、現在のすべての HTTPS セッションが閉じられます。ユーザは、次のように新しいポートを使用して再度 Firepower Chassis Manager にログインする必要があります。

```
https://<chassis_mgmt_ip_address>:<chassis_mgmt_port>
```

<*chassis_mgmt_ip_address*> は、初期設定時に入力した Firepower シャーシの IP アドレスまたはホスト名で、<*chassis_mgmt_port*> は設定が完了した HTTPS ポートです。

例

次の例では、HTTPS ポート番号を 443 に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # set https port 444
Warning: When committed, this closes all the web sessions.
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

キーリングの削除

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis # scope security
```

ステップ 2 名前付きのキー リングを削除します。

```
Firepower-chassis /security # delete keyring name
```

ステップ 3 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /security # commit-buffer
```

例

次の例では、キー リングを削除します。


```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # delete keyring key10
Firepower-chassis /security* # commit-buffer
Firepower-chassis /security #
```

トラスト ポイントの削除

始める前に

トラスト ポイントがキー リングによって使用されていないことを確認してください。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ 2 指定したトラスト ポイントを削除します。

```
Firepower-chassis /security # delete trustpoint name
```

ステップ 3 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /security # commit-buffer
```

例

次に、トラスト ポイントを削除する例を示します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # delete trustpoint tPoint10
Firepower-chassis /security* # commit-buffer
Firepower-chassis /security #
```

HTTPS の無効化

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis# scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 HTTPS サービスを無効にします。

```
Firepower-chassis /system/services # disable https
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /system/services # commit-buffer
```

例

次に、HTTPS をディセーブルにし、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope system  
Firepower-chassis /system # scope services  
Firepower-chassis /system/services # disable https  
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer  
Firepower-chassis /system/services #
```

AAA の設定

ここでは、認証、認可、アカウントिंगについて説明します。詳細については、次のトピックを参照してください。

AAA について

AAA は、コンピュータ リソースへのアクセスを制御し、ポリシーを使用し、使用率を評価することでサービス課金に必要な情報を提供する、一連のサービスです。これらの処理は、効果的なネットワーク管理およびセキュリティにとって重要です。

認証

認証はユーザを特定する方法です。アクセスが許可されるには、ユーザは通常、有効なユーザ名と有効なパスワードが必要です。AAA サーバは、データベースに保存されている他のユーザ クレデンシャルとユーザの認証資格情報を比較します。クレデンシャルが一致する場合、ユーザはネットワークへのアクセスが許可されます。クレデンシャルが一致しない場合は、認証は失敗し、ネットワーク アクセスは拒否されます。

シャーシへの管理接続を認証するように Firepower 4100/9300 シャーシ を設定できます。これには、次のセッションが含まれます。

- HTTPS
- SSH
- シリアル コンソール

認可

許可はポリシーを適用するプロセスです。どのようなアクティビティ、リソース、サービスに対するアクセス許可をユーザが持っているのかを判断します。ユーザが認証されると、そのユーザはさまざまなタイプのアクセスやアクティビティを認可される可能性があります。

Accounting

アカウントリングは、アクセス時にユーザが消費したリソースを測定します。これには、システム時間またはセッション中にユーザが送受信したデータ量などが含まれます。アカウントリングは、許可制御、課金、トレンド分析、リソース使用率、キャパシティプランニングのアクティビティに使用されるセッションの統計情報と使用状況情報のログを通じて行われます。

認証、認可、アカウントリング間の相互作用

認証だけで使用することも、認可およびアカウントリングとともに使用することもできます。認可では必ず、ユーザの認証が最初に済んでいる必要があります。アカウントリングだけで使用することも、認証および認可とともに使用することもできます。

AAA Servers

AAA サーバは、アクセス制御に使用されるネットワーク サーバです。認証は、ユーザを識別します。認可は、認証されたユーザがアクセスする可能性があるリソースとサービスを決定するポリシーを実行します。アカウントリングは、課金と分析に使用される時間とデータのリソースを追跡します。

ローカル データベースのサポート

Firepower シャーシは、ユーザ プロファイルを取り込むことができるローカル データベースを維持します。AAA サーバの代わりにローカル データベースを使用して、ユーザ認証、認可、アカウントリングを提供することもできます。

LDAP プロバイダーの設定

LDAP プロバイダーのプロパティの設定

このタスクで設定するプロパティが、このタイプのすべてのプロバイダー接続のデフォルト設定です。個々のプロバイダーにいずれかのプロパティの設定が含まれている場合、Firepower eXtensible Operating System でその設定が使用され、デフォルト設定は無視されます。

Active Directory を LDAP サーバとして使用している場合は、Active Directory サーバで Firepower eXtensible Operating System にバインドするユーザ アカウントを作成します。このアカウントには、期限切れにならないパスワードを設定します。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ 2 セキュリティ LDAP モードを開始します

```
Firepower-chassis /security # scope ldap
```

ステップ 3 指定した属性を含むレコードにデータベース検索を限定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # set attribute attribute
```

ステップ 4 指定した識別名を含むレコードにデータベース検索を限定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # set basedn distinguished-name
```

ステップ 5 指定したフィルタを含むレコードにデータベース検索を限定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # set filter filter
```

ステップ 6 システムがサーバをダウン状態として通知する前に、LDAP サーバからの応答を待つ時間間隔を設定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # set timeout seconds
```

ステップ 7 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/ldap # commit-buffer
```

例

次の例では、LDAP 属性を CiscoAvPair に、ベース識別名を「DC=cisco-firepower-aaa3,DC=qalab,DC=com」に、フィルタを sAMAccountName=\$userid に、タイムアウト間隔を 5 秒に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope ldap
Firepower-chassis /security/ldap # set attribute CiscoAvPair
Firepower-chassis /security/ldap* # set basedn "DC=cisco-firepower-aaa3,DC=qalab,DC=com"
Firepower-chassis /security/ldap* # set filter sAMAccountName=$userid
Firepower-chassis /security/ldap* # set timeout 5
Firepower-chassis /security/ldap* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/ldap #
```



(注) ユーザログインは LDAP ユーザの userdn が 255 文字を超えると失敗します。

次のタスク

LDAP プロバイダーを作成します。

LDAP プロバイダーの作成

Firepower eXtensible Operating System では、最大 16 の LDAP プロバイダーをサポートします。

始める前に

Active Directory を LDAP サーバとして使用している場合は、Active Directory サーバで Firepower eXtensible Operating System にバインドするユーザアカウントを作成します。このアカウントには、期限切れにならないパスワードを設定します。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ 2 セキュリティ LDAP モードを開始します

```
Firepower-chassis /security # scope ldap
```

ステップ 3 LDAP サーバインスタンスを作成し、セキュリティ LDAP サーバモードを開始します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # create server server-name
```

SSL がイネーブルの場合、*server-name* は、通常 IP アドレスまたは FQDN となり、LDAP サーバのセキュリティ証明書内の Common Name (CN) と正確に一致している必要があります。IP アドレスが指定されている場合を除き、DNS サーバを設定する必要があります。

ステップ 4 (任意) ユーザ ロールとロケールの値を保管する LDAP 属性を設定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set attribute attr-name
```

このプロパティは、常に、名前と値のペアで指定されます。システムは、ユーザレコードで、この属性名と一致する値を検索します。

デフォルトの属性が LDAP プロバイダー用に設定されていない場合は、この値が必要です。

ステップ 5 (任意) リモート ユーザがログインし、システムがそのユーザ名に基づいてユーザの DN の取得を試みるときに、サーバが検索を開始する LDAP 階層内の特定の識別名を設定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set basedn basedn-name
```

ベース DN の長さは、最大 255 文字から CN=username の長さを引いた長さに設定することができます。username により、LDAP 認証を使用して Firepower Chassis Manager または FXOS CLI にアクセスしようとするリモート ユーザが識別されます。

デフォルトのベース DN が LDAP プロバイダー用に設定されていない場合は、この値が必要です。

ステップ 6 (任意) ベース DN 下のすべてのオブジェクトに対する読み取り権限と検索権限を持つ、LDAP データベース アカウントの識別名 (DN) を設定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set binddn binddn-name
```

サポートされるストリングの最大長は 255 文字（ASCII）です。

ステップ 7 （任意） LDAP 検索を、定義されたフィルタと一致するユーザ名に制限します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set filter filter-value
```

デフォルトのフィルタが LDAP プロバイダー用に設定されていない場合は、この値が必要です。

ステップ 8 バインド DN で指定した LDAP データベース アカウントのパスワードを指定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set password
```

標準 ASCII 文字を入力できます。ただし、「\$」（セクション記号）、「?」（疑問符）、「=」（等号）は除きます。

パスワードを設定するには、**set password** コマンドを入力してから **Enter** を押し、プロンプトでキー値を入力します。

ステップ 9 （任意） Firepower eXtensible Operating System でこのプロバイダーをユーザの認証に使用する順序を指定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set order order-num
```

ステップ 10 （任意） LDAP サーバとの通信に使用するポートを指定します。標準ポート番号は 389 です。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set port port-num
```

ステップ 11 LDAP サーバと通信するときの暗号化の使用を有効化またはディセーブルにします。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set ssl {yes | no}
```

オプションは次のとおりです。

- **yes** : 暗号化が必要です。暗号化をネゴシエートできない場合は、接続に失敗します。
- **no** : 暗号化はディセーブルです。認証情報はクリア テキストとして送信されます。

LDAP では STARTTLS が使用されます。これにより、ポート 389 を使用した暗号化通信が可能になります。

ステップ 12 LDAP データベースへの問い合わせがタイムアウトするまでの秒数を指定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set timeout timeout-num
```

1 ~ 60 秒の整数を入力するか、0（ゼロ）を入力して LDAP プロバイダーで指定したグローバルタイムアウト値を使用します。デフォルトは 30 秒です。

ステップ 13 LDAP プロバイダーやサーバの詳細を提供するベンダーを指定します。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set vendor {ms-ad | openldap}
```

オプションは次のとおりです。

- **ms-ad** : LDAP プロバイダーは Microsoft Active Directory です。
- **openldap** : LDAP プロバイダーは Microsoft Active Directory ではありません。

ステップ 14 (任意) 証明書失効リスト検査を有効にします。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # set revoke-policy {strict | relaxed}
```

(注) この設定は、SSL 接続が使用可能である場合にのみ有効です。

ステップ 15 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/ldap/server # commit-buffer
```

例

次の例では、10.193.169.246 という名前の LDAP サーバインスタンスを作成し、binddn、パスワード、順序、ポート、SSL、ベンダー属性を設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope ldap
Firepower-chassis /security/ldap* # create server 10.193.169.246
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set binddn
"cn=Administrator,cn=Users,DC=cisco-firepower-aaa3,DC=qalab,DC=com"
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set password
Enter the password:
Confirm the password:
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set order 2
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set port 389
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set ssl yes
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set timeout 30
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set vendor ms-ad
Firepower-chassis /security/ldap/server* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/ldap/server #
```

次の例では、12:31:71:1231:45b1:0011:011:900 という名前の LDAP サーバインスタンスを作成し、binddn、パスワード、順序、ポート、SSL、ベンダー属性を設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope ldap
Firepower-chassis /security/ldap* # create server 12:31:71:1231:45b1:0011:011:900
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set binddn
"cn=Administrator,cn=Users,DC=cisco-firepower-aaa3,DC=qalab,DC=com"
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set password
Enter the password:
Confirm the password:
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set order 1
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set port 389
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set ssl yes
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set timeout 45
Firepower-chassis /security/ldap/server* # set vendor ms-ad
Firepower-chassis /security/ldap/server* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/ldap/server #
```

LDAP プロバイダーの削除

手順

ステップ1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ2 セキュリティ LDAP モードを開始します

```
Firepower-chassis /security # scope ldap
```

ステップ3 指定したサーバを削除します。

```
Firepower-chassis /security/ldap # delete server serv-name
```

ステップ4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/ldap # commit-buffer
```

例

次に、ldap1 という名前のLDAPサーバを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope ldap
Firepower-chassis /security/ldap # delete server ldap1
Firepower-chassis /security/ldap* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/ldap #
```

RADIUS プロバイダーの設定

RADIUS プロバイダーのプロパティの設定

このタスクで設定するプロパティが、このタイプのすべてのプロバイダー接続のデフォルト設定です。個々のプロバイダーにいずれかのプロパティの設定が含まれている場合、Firepower eXtensible Operating System でその設定が使用され、デフォルト設定は無視されます。

手順

ステップ1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ2 セキュリティ RADIUS モードを開始します

```
Firepower-chassis /security # scope radius
```


ステップ3 (任意) サーバをダウン状態として通知する前に RADIUS サーバとの通信を再試行する回数を指定します。

```
Firepower-chassis /security/radius # set retries retry-num
```

ステップ4 (任意) システムがサーバをダウン状態として通知する前に、RADIUS サーバからの応答を待つ時間間隔を設定します。

```
Firepower-chassis /security/radius # set timeout seconds
```

ステップ5 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/radius # commit-buffer
```

例

次の例は、RADIUS リトライを4に設定し、タイムアウト間隔を30秒に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security  
Firepower-chassis /security # scope radius  
Firepower-chassis /security/radius # set retries 4  
Firepower-chassis /security/radius* # set timeout 30  
Firepower-chassis /security/radius* # commit-buffer  
Firepower-chassis /security/radius #
```

次のタスク

RADIUS プロバイダーを作成します。

RADIUS プロバイダーの作成

Firepower eXtensible Operating System では、最大16のRADIUS プロバイダーをサポートします。

手順

ステップ1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ2 セキュリティ RADIUS モードを開始します

```
Firepower-chassis /security # scope radius
```

ステップ3 RADIUS サーバインスタンスを作成し、セキュリティ RADIUS サーバモードを開始します。

```
Firepower-chassis /security/radius # create server server-name
```

ステップ4 (任意) RADIUS サーバとの通信に使用するポートを指定します。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # set authport authport-num
```

ステップ 5 RADIUS サーバ キーを設定します。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # set key
```

キー値を設定するには、**set key** コマンドを入力してから **Enter** を押し、プロンプトでキー値を入力します。

ステップ 6 (任意) このサーバが試行される順序を指定します。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # set order order-num
```

ステップ 7 (任意) サーバをダウン状態として通知する前に RADIUS サーバとの通信を再試行する回数を設定します。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # set retries retry-num
```

ステップ 8 システムがサーバをダウン状態として通知する前に、RADIUS サーバからの応答を待つ時間間隔を指定します。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # set timeout seconds
```

ヒント RADIUS プロバイダーに二要素認証を選択する場合は、より高いタイムアウト値を設定することを推奨します。

ステップ 9 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/radius/server # commit-buffer
```

例

次の例は、`radiuserv7` という名前のサーバインスタンスを作成し、認証ポートを 5858 に設定し、キーを `radiuskey321` に設定し、順序を 2 に設定し、再試行回数を 4 回に設定し、タイムアウトを 30 に設定し、二要素認証をイネーブルにし、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope radius
Firepower-chassis /security/radius # create server radiusserv7
Firepower-chassis /security/radius/server* # set authport 5858
Firepower-chassis /security/radius/server* # set key
Enter the key: radiuskey321
Confirm the key: radiuskey321
Firepower-chassis /security/radius/server* # set order 2
Firepower-chassis /security/radius/server* # set retries 4
Firepower-chassis /security/radius/server* # set timeout 30
Firepower-chassis /security/radius/server* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/radius/server #
```

RADIUS プロバイダーの削除

手順

- ステップ 1** セキュリティ モードを開始します。
Firepower-chassis# **scope security**
- ステップ 2** セキュリティ RADIUS モードを開始します
Firepower-chassis /security # **scope RADIUS**
- ステップ 3** 指定したサーバを削除します。
Firepower-chassis /security/radius # **delete server** *serv-name*
- ステップ 4** トランザクションをシステム設定にコミットします。
Firepower-chassis /security/radius # **commit-buffer**
-

例

次の例は、radius1 という RADIUS サーバを削除し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope radius
Firepower-chassis /security/radius # delete server radius1
Firepower-chassis /security/radius* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/radius #
```

TACACS+ プロバイダーの設定

TACACS+ プロバイダーのプロパティの設定

このタスクで設定するプロパティが、このタイプのすべてのプロバイダー接続のデフォルト設定です。個々のプロバイダーにいずれかのプロパティの設定が含まれている場合、Firepower eXtensible Operating System でその設定が使用され、デフォルト設定は無視されます。

手順

- ステップ 1** セキュリティ モードを開始します。
Firepower-chassis# **scope security**
- ステップ 2** セキュリティ TACACS+ モードを開始します。
Firepower-chassis /security # **scope tacacs**

ステップ 3 (任意) システムがサーバをダウン状態として通知する前に、TACACS+サーバからの応答を待つ時間間隔を設定します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs # set timeout seconds
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/tacacs # commit-buffer
```

例

次の例は、TACACS+ タイムアウト間隔を 45 秒に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope tacacs
Firepower-chassis /security/tacacs # set timeout 45
Firepower-chassis /security/tacacs* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/tacacs #
```

次のタスク

TACACS+ プロバイダーを作成します。

TACACS+ プロバイダーの作成

Firepower eXtensible Operating System では、最大 16 の TACACS+ プロバイダーをサポートします。

手順

ステップ 1 セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

ステップ 2 セキュリティ TACACS+ モードを開始します。

```
Firepower-chassis /security # scope tacacs
```

ステップ 3 TACACS+ サーバインスタンスを作成し、TACACS+ サーバ モードを開始します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs # create server server-name
```

ステップ 4 TACACS+ サーバ キーを指定します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs/server # set key
```

キー値を設定するには、**set key** コマンドを入力してから **Enter** を押し、プロンプトでキー値を入力します。

ステップ 5 (任意) このサーバが試行される順序を指定します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs/server # set order order-num
```

- ステップ 6** システムがサーバをダウン状態として通知する前に、TACACS+ サーバからの応答を待つ時間間隔を指定します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs/server # set timeout seconds
```

ヒント TACACS+ プロバイダーに二要素認証を選択する場合は、より高いタイムアウト値を設定することを推奨します。

- ステップ 7** (任意) TACACS+ サーバとの通信に使用するポートを指定します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs/server # set port port-num
```

- ステップ 8** トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/tacacs/server # commit-buffer
```

例

次の例は、tacacsserv680 という名前のサーバインスタンスを作成し、キーを tacacskey321 に設定し、順序を 4 に設定し、認証ポートを 5859 に設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope tacacs
Firepower-chassis /security/tacacs # create server tacacsserv680
Firepower-chassis /security/tacacs/server* # set key
Enter the key: tacacskey321
Confirm the key: tacacskey321
Firepower-chassis /security/tacacs/server* # set order 4
Firepower-chassis /security/tacacs/server* # set port 5859
Firepower-chassis /security/tacacs/server* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/tacacs/server #
```

TACACS+ プロバイダーの削除

手順

- ステップ 1** セキュリティ モードを開始します。

```
Firepower-chassis# scope security
```

- ステップ 2** セキュリティ TACACS+ モードを開始します。

```
Firepower-chassis /security # scope tacacs
```

- ステップ 3** 指定したサーバを削除します。

```
Firepower-chassis /security/tacacs # delete server serv-name
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower-chassis /security/tacacs # commit-buffer
```

例

次の例では、tacacs1 という TACACS+ サーバを削除し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope security
Firepower-chassis /security # scope tacacs
Firepower-chassis /security/tacacs # delete server tacacs1
Firepower-chassis /security/tacacs* # commit-buffer
Firepower-chassis /security/tacacs #
```

Syslog の設定

システム ロギングは、デバイスから syslog デーモンを実行するサーバへのメッセージを収集する方法です。中央の syslog サーバへロギングは、ログおよびアラートの集約に役立ちます。syslog サービスは、シンプル コンフィギュレーション ファイルに従って、メッセージを受信してファイルに保存するか、出力します。この形式のロギングは、保護された長期的な保存場所をログに提供します。ログは、ルーチントラブルシューティングおよびインシデント処理の両方で役立ちます。

手順

- ステップ 1** モニタリング モードを開始します。
- ```
Firepower-chassis# scope monitoring
```
- ステップ 2** コンソールへの syslog の送信を有効化またはディセーブルにします。
- ```
Firepower-chassis /monitoring # {enable | disable} syslog console
```
- ステップ 3** (任意) 表示するメッセージの最低レベルを選択します。syslog が使用可能である場合、システムはそのレベル以上のメッセージをコンソールに表示します。レベル オプションは緊急性の降順で一覧表示されます。デフォルトのレベルは Critical です。
- ```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog console level {emergencies | alerts | critical}
```
- ステップ 4** オペレーティング システムによる syslog 情報のモニタリングを有効化またはディセーブルにします。
- ```
Firepower-chassis /monitoring # {enable | disable} syslog monitor
```
- ステップ 5** (任意) 表示するメッセージの最低レベルを選択します。モニタの状態が有効の場合、システムはそのレベル以上のメッセージを表示します。レベル オプションは緊急性の降順で一覧表示されます。デフォルトのレベルは Critical です。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog monitor level {emergencies | alerts | critical | errors |
warnings | notifications | information | debugging}
```

(注) **terminal monitor** コマンドを入力した場合にだけ、Critical より下のレベルのメッセージが端末のモニタに表示されます。

ステップ 6 syslog ファイルへの syslog 情報の書き込みを有効化またはディセーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring # {enable | disable} syslog file
```

ステップ 7 メッセージが記録されるファイルの名前を指定します。ファイル名は 16 文字まで入力できません。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog file name filename
```

ステップ 8 (任意) ファイルに保存するメッセージの最低レベルを選択します。ファイルの状態が有効の場合、システムはそのレベル以上のメッセージを syslog ファイルに保存します。レベル オプションは緊急性の降順で一覧表示されます。デフォルトのレベルは Critical です。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog file level {emergencies | alerts | critical | errors | warnings |
notifications | information | debugging}
```

ステップ 9 (任意) 最新のメッセージで最も古いメッセージが上書きされる前の最大ファイルサイズ (バイト単位) を指定します。有効な範囲は 4096 ~ 4194304 バイトです。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog file size filesize
```

ステップ 10 最大 3 台の外部 syslog サーバへの syslog メッセージの送信を設定します。

a) 最大 3 台の外部 syslog サーバへの syslog メッセージの送信を有効化またはディセーブルにします。

```
Firepower-chassis /monitoring # {enable | disable} syslog remote-destination {server-1 | server-2 |
server-3}
```

b) (任意) 外部ログに保存するメッセージの最低レベルを選択します。リモート宛先が有効になっている場合、システムはそのレベル以上のメッセージを外部サーバに送信します。レベル オプションは緊急性の降順で一覧表示されます。デフォルトのレベルは Critical です。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog remote-destination {server-1 | server-2 | server-3}
level {emergencies | alerts | critical | errors | warnings | notifications | information | debugging}
```

c) 指定したリモート syslog サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。ホスト名は 256 文字まで入力できます。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog remote-destination {server-1 | server-2 | server-3}
hostname hostname
```

d) (任意) 指定したリモート syslog サーバに送信される syslog メッセージに含まれるファシリティ レベルを指定します。

```
Firepower-chassis /monitoring # set syslog remote-destination {server-1 | server-2 | server-3}
facility {local0 | local1 | local2 | local3 | local4 | local5 | local6 | local7}
```

ステップ 11 ローカル送信元を設定します。有効化またはディセーブルにするローカル送信元ごとに、次のコマンドを入力します。

```
Firepower-chassis /monitoring # {enable | disable} syslog source {audits | events | faults}
```

次のいずれかになります。

- **audits** : すべての監査ログ イベントのロギングをイネーブルまたはディセーブルにします。
- **events** : すべてのシステム イベントのロギングをイネーブルまたはディセーブルにします。
- **faults** : すべてのシステム障害のロギングを有効化またはディセーブルにします。

ステップ 12 トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis /monitoring # commit-buffer
```

例

次の例は、ローカルファイルの syslog メッセージのストレージをイネーブルにし、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope monitoring
Firepower-chassis /monitoring # disable syslog console
Firepower-chassis /monitoring* # disable syslog monitor
Firepower-chassis /monitoring* # enable syslog file
Firepower-chassis /monitoring* # set syslog file name SysMsgsFirepower
Firepower-chassis /monitoring* # set syslog file level notifications
Firepower-chassis /monitoring* # set syslog file size 4194304
Firepower-chassis /monitoring* # disable syslog remote-destination server-1
Firepower-chassis /monitoring* # disable syslog remote-destination server-2
Firepower-chassis /monitoring* # disable syslog remote-destination server-3
Firepower-chassis /monitoring* # commit-buffer
Firepower-chassis /monitoring #
```

DNS サーバの設定

システムでホスト名の IP アドレスへの解決が必要な場合は、DNS サーバを指定する必要があります。たとえば、DNS サーバを設定していないと、Firepower シャーシで設定を行うときに、`www.cisco.com` などの名前を使用できません。サーバの IP アドレスを使用する必要があり、IPv4 または IPv6 アドレスのいずれかを使用できます。最大 4 台の DNS サーバを設定できます。



- (注) 複数の DNS サーバを設定する場合、システムによるサーバの検索順はランダムになります。ローカル管理コマンドが DNS サーバの検索を必要とする場合、3 台の DNS サーバのみをランダムに検索します。

手順

ステップ 1 システム モードに入ります。

```
Firepower-chassis # scope system
```

ステップ 2 システム サービス モードを開始します。

```
Firepower-chassis /system # scope services
```

ステップ 3 DNS サーバを作成または削除するには、次の該当するコマンドを入力します。

- 指定した IPv4 または IPv6 アドレスの DNS サーバを使用するようにシステムを設定する場合：

```
Firepower-chassis /system/services # create dns {ip-addr | ip6-addr}
```

- 指定した IPv4 または IPv6 アドレスの DNS サーバを削除する場合：

```
Firepower-chassis /system/services # delete dns {ip-addr | ip6-addr}
```

ステップ 4 トランザクションをシステム設定にコミットします。

```
Firepower /system/services # commit-buffer
```

例

次の例では、IPv4 アドレス 192.168.200.105 を持つ DNS サーバを設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # create dns 192.168.200.105
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

次の例では、IPv6 アドレス 2001:db8::22:F376:FF3B:AB3F を持つ DNS サーバを設定し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # create dns 2001:db8::22:F376:FF3B:AB3F
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

次の例では、IP アドレス 192.168.200.105 を持つ DNS サーバを削除し、トランザクションをコミットします。

```
Firepower-chassis# scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # delete dns 192.168.200.105
Firepower-chassis /system/services* # commit-buffer
Firepower-chassis /system/services #
```

FIPS モードの有効化

Firepower 4100/9300 シャーシで FIPS モードを有効にするには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 FXOS CLI から、セキュリティ モードを開始します。

```
scope system
scope security
```

ステップ 2 FIPS モードを有効にします。

```
enable fips-mode
```

ステップ 3 設定をコミットします。

```
commit-buffer
```

ステップ 4 システムを再起動します。

```
connect local-mgmt
reboot
```

次のタスク

FXOS リリース 2.0.1 より以前は、デバイスの最初の設定時に作成した SSH ホスト キーが 1024 ビットにハードコードされていました。FIPS およびコモン クライテリア 認定要件に準拠するには、この古いホスト キーを破棄し、[SSH ホスト キーの生成](#) で詳細を説明する手順を使用して新しいホスト キーを生成する必要があります。これらの追加手順を実行しないと、FIPS モードを有効にしてデバイスをリブートした後に、SSH を使用してスーパーバイザに接続できなくなります。FXOS 2.0.1 以降を使用して初期設定を行った場合は、新しいホスト キーを生成する必要はありません。

コモンクライテリア モードの有効化

Firepower 4100/9300 シャーシ上でコモンクライテリア モードを有効にするには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 FXOS CLI から、セキュリティ モードを開始します。

```
scope system
```

```
scope security
```

ステップ 2 コモンクライテリア モードを有効化します。

```
enable cc-mode
```

ステップ 3 設定をコミットします。

```
commit-buffer
```

ステップ 4 システムを再起動します。

```
connect local-mgmt
```

```
reboot
```

次のタスク

FXOS リリース 2.0.1 より以前は、デバイスの最初の設定時に作成した SSH ホストキーが 1024 ビットにハードコードされていました。FIPS およびコモンクライテリア認定要件に準拠するには、この古いホストキーを破棄し、[SSH ホストキーの生成](#) で詳細を説明する手順を使用して新しいホストキーを生成する必要があります。これらの追加手順を実行しないと、コモンクライテリアモードを有効にしてデバイスをリブートした後に、SSH を使用してスーパーバイザに接続できなくなります。FXOS 2.0.1 以降を使用して初期設定を行った場合は、新しいホストキーを生成する必要はありません。

IP アクセス リストの設定

デフォルトでは、Firepower 4100/9300 シャーシはローカル Web サーバへのすべてのアクセスを拒否します。IP アクセス リストを、各 IP ブロックの許可されるサービスのリストを使用して設定する必要があります。

IP アクセス リストは、次のプロトコルをサポートします。

- HTTPS

- SNMP
- SSH

IP アドレス (v4 または v6) の各ブロックで、最大 25 個の異なるサブネットを各サービスに対して設定できます。サブネットを 0、プレフィックスを 0 と指定すると、サービスに無制限にアクセスできるようになります。

手順

ステップ 1 FXOS CLI から、サービス モードを開始します。

```
scope system
```

```
scope services
```

ステップ 2 アクセスできるようにするサービスの IP ブロックを作成します。

IPv4 の場合

```
create ip-block ip prefix [0-32] [http | snmp | ssh]
```

IPv6 の場合

```
create ipv6-block ip prefix [0-28] [http | snmp | ssh]
```

例

IPv4 :

```
Firepower-chassis # scope system
Firepower-chassis /system # scope services
Firepower-chassis /system/services # create ip-block 10.1.1.1 24 https
Firepower-chassis /system/services/ip-block* # com
Firepower-chassis /system/services/ip-block # up
Firepower-chassis /system/services # create ip-block 11.1.1.1 24 ssh
Firepower-chassis /system/services/ip-block* # com
Firepower-chassis /system/services/ip-block # up
Firepower-chassis /system/services # create ip-block 12.1.1.1 24 snmp
Firepower-chassis /system/services/ip-block* # com
Firepower-chassis /system/services/ip-block # up
Firepower-chassis /system/services # sh ip-block
Permitted IP Block:
  IP Address      Prefix Length Protocol
  -----
  10.1.1.1        24           Https
  11.1.1.1        24           Ssh
  12.1.1.1        24           Snmp
```

IPv6 :

```
Firepower-chassis /system/services # create ipv6-block 2014::10:76:78:107 64 ssh
Firepower-chassis /system/services/ipv6-block* # com
Firepower-chassis /system/services/ipv6-block # up
Firepower-chassis /system/services # create ipv6-block 2014::10:76:78:107 64 snmp
Firepower-chassis /system/services/ipv6-block* # com
```

```

Firepower-chassis /system/services/ipv6-block # up
Firepower-chassis /system/services # create ipv6-block 2014::10:76:78:107 64 https
Firepower-chassis /system/services/ipv6-block* # com
Firepower-chassis /system/services/ipv6-block # up
Firepower-chassis /system/services # sh ipv6-block
Permitted IPv6 Block:
  IPv6 Address Prefix Length Protocol
  -----
  2014::10:76:78:107    64    Https
  2014::10:76:78:107    64    Snmp
  2014::10:76:78:107    64    Ssh

```

MAC プール プレフィックスの追加とコンテナ インスタンス インターフェイスの MAC アドレスの表示

FXOS シャーシは、各インスタンスの共有インターフェイスが一意的 MAC アドレスを使用するように、コンテナインスタンスインターフェイスの MAC アドレスを自動的に生成します。FXOS シャーシは、次の形式を使用して MAC アドレスを生成します。

A2xx.yyzz.zzzz

xx.yy はユーザ定義のプレフィックスまたはシステム定義のプレフィックスであり、zz.zzzz はシャーシが生成した内部カウンタです。システム定義のプレフィックスは、IDPROM にプログラムされている Burned-In MAC アドレス プール内の最初の MAC アドレスの下部 2 バイトと一致します。connect fxos を使用し、次に show module を使用して、MAC アドレス プールを表示します。たとえば、モジュール 1 について示されている MAC アドレスの範囲が b0aa.772f.f0b0 ~ b0aa.772f.f0bf の場合、システム プレフィックスは f0b0 になります。

詳細については、[コンテナ インスタンス インターフェイスの自動 MAC アドレス](#)を参照してください。

この手順では、MAC アドレスの表示方法と生成で使用されるプレフィックスのオプションの定義方法について説明します。



- (注) 論理デバイスの展開後に MAC アドレスのプレフィックスを変更すると、トラフィックが中断される可能性があります。

手順

ステップ 1 セキュリティ サービス モードを開始してから、自動 MAC プール モードを開始します。

scope ssa

scope auto-macpool

例 :

```
Firepower# scope ssa
Firepower /ssa # scope auto-macpool
Firepower /ssa/auto-macpool #
```

ステップ 2 MAC アドレスの生成時に使用される MAC アドレスのプレフィックスを設定します。

set prefix *prefix*

- *prefix* : 1 ~ 65535 の 10 進数を入力します。このプレフィックスは 4 桁の 16 進数値に変換され、MAC アドレスの一部として使用されます。

プレフィックスの使用法を示す例の場合、プレフィックス 77 を設定すると、シャージは 77 を 16 進数値 004D (yxxx) に変換します。MAC アドレスで使用すると、プレフィックスは シャーシネイティブ形式に一致するように逆にされます (xyyy)。

A24D.00zz.zzzz

プレフィックス 1009 (03F1) の場合、MAC アドレスは次のようになります。

A2F1.03zz.zzzz

例 :

```
Firepower /ssa/auto-macpool # set prefix 65
Firepower /ssa/auto-macpool* #
```

ステップ 3 設定を保存します。

commit-buffer

例 :

```
Firepower /ssa/auto-macpool* # commit-buffer
Firepower /ssa/auto-macpool #
```

ステップ 4 MAC アドレスの割り当てを表示します。

show mac-address

例 :

```
Firepower /ssa/auto-macpool # show mac-address
Mac Address Item:
  Mac Address      Owner Profile      Owner Name
  -----
  A2:46:C4:00:00:1E  ftd13              Port-channel14
  A2:46:C4:00:00:20  ftd14              Port-channel15
  A2:46:C4:00:01:7B  ftd1               Ethernet1/3
  A2:46:C4:00:01:7C  ftd12              Port-channel11
  A2:46:C4:00:01:7D  ftd13              Port-channel14
  A2:46:C4:00:01:7E  ftd14              Port-channel15
  A2:46:C4:00:01:7F  ftd1               Ethernet1/2
  A2:46:C4:00:01:80  ftd12              Ethernet1/2
  A2:46:C4:00:01:81  ftd13              Ethernet1/2
  A2:46:C4:00:01:82  ftd14              Ethernet1/2
  A2:46:C4:00:01:83  ftd2               Ethernet3/1/4
  A2:46:C4:00:01:84  ftd2               Ethernet3/1/1
```

```

A2:46:C4:00:01:85    ftd2    Ethernet3/1/3
A2:46:C4:00:01:86    ftd2    Ethernet3/1/2
A2:46:C4:00:01:87    ftd2    Ethernet1/2
A2:46:C4:00:01:88    ftd1    Port-channel21
A2:46:C4:00:01:89    ftd1    Ethernet1/8

```

例

次の例では、MAC プレフィックスを 33 に設定しています。

```

Firepower# scope ssa
Firepower /ssa # scope auto-macpool
Firepower /ssa/auto-macpool # set prefix 33
Firepower /ssa/auto-macpool* # commit-buffer
Firepower /ssa/auto-macpool #

```

コンテナ インスタンスのリソース プロファイルの追加

コンテナインスタンスごとにリソースの使用率を指定するには、1つまたは複数のリソース プロファイルを作成します。論理デバイス/アプリケーションインスタンスを展開する場合は、使用するリソースのプロファイルを指定します。リソース プロファイルは CPU コアの数を設定します。RAM およびディスク容量はコアの数に従って動的に割り当てられます。

- コアの最小数は 6 です。
- 内部アーキテクチャにより 8 コアを指定することはできません。
- コアを偶数（6、10、12、14 など）で最大値まで割り当てることができます。
- 利用可能な最大コア数は、セキュリティ モジュール/シャーシモデルによって異なります。 [コンテナ インスタンスの要件と前提条件](#)を参照してください。

シャーシには、「Default-Small」と呼ばれるデフォルトリソースプロファイルが含まれています。このコア数は最小です。このプロファイルの定義を変更したり、使用されていない場合には削除することもできます。シャーシをリロードし、システムに他のプロファイルが存在しない場合は、このプロファイルが作成されます。

リソース プロファイルの設定を変更すると、このリソース プロファイルを使用するすべてのインスタンスがリロードされます。これには約 5 分かかります。

FTD インスタンスを FMC に追加した後にリソース プロファイル設定を変更する場合は、**[Devices] > [Device Management] > [Device] > [System] > [Inventory]** ダイアログボックスで各ユニットのインベントリを更新します。

手順

ステップ 1 セキュリティ サービス モードを開始します。

scope ssa

例 :

```
Firepower# scope ssa
Firepower /ssa #
```

ステップ 2 リソース プロファイルを作成します。

enter resource-profile name

- **name** : プロファイルの名前を 1 ~ 64 文字で設定します。追加後にこのプロファイルの名前を変更することはできません。

例 :

```
Firepower /ssa # enter resource-profile gold
Firepower /ssa/resource-profile* #
```

ステップ 3 説明を入力します。

set description description

- **description** : プロファイルの説明を最大 510 文字で設定します。フレーズを引用符 (") で囲み、スペースを追加します。

例 :

```
Firepower /ssa/resource-profile* # set description "highest level"
```

ステップ 4 CPU コアの数を設定します。

set cpu-core-count コア

- **cores** : シャーシに応じて、プロファイルのコア数を 6 ~ 最大数 (偶数) で設定します。8 コアを指定することはできません。

例 :

```
Firepower /ssa/resource-profile* # set cpu-core-count 14
```

ステップ 5 設定を保存します。

commit-buffer

例 :

```
Firepower /ssa/resource-profile* # commit-buffer
```



```
Firepower /ssa/resource-profile #
```

ステップ 6 セキュリティ サービス モードからリソース プロファイルの割り当てを表示します。

show resource-profile user-defined

例 :

```
Firepower /ssa # show resource-profile user-defined
Profile Name      Is In Use  CPU Logical Core Count  Description
-----
bronze            No         6                        low end device
gold              No         14                       highest
silver            No         10                       mid-level
```

ステップ 7 セキュリティ モジュール / エンジン スロットのリソース使用率を表示します。

show monitor detail

例 :

```
Firepower /ssa # scope slot 1
Firepower /ssa/slot # show monitor detail
Monitor:
  OS Version:
  CPU Total Load 1 min Avg: 18.959999
  CPU Total Load 5 min Avg: 19.080000
  CPU Total Load 15 min Avg: 19.059999
  Memory Total (MB): 252835
  Memory Free (MB): 200098
  Memory Used (MB): 52738
  CPU Cores Total: 72
  CPU Cores Available: 30
  Memory App Total (MB): 226897
  Memory App Available (MB): 97245
  Data Disk Total (MB): 1587858
  Data Disk Available (MB): 1391250
  Secondary Disk Total (MB): 0
  Secondary Disk Available (MB): 0
  Disk File System Count: 7
  Blade Uptime:
  Last Updated Timestamp: 2018-05-23T14:26:06.132
```

ステップ 8 アプリケーション インスタンスのリソース割り当てを表示します。

show resource detail

例 :

```
Firepower /ssa # scope slot 1
Firepower /ssa/slot # enter app-instance ftd ftd1
Firepower /ssa/slot/app-instance # show resource detail
Resource:
  Allocated Core NR: 10
  Allocated RAM (MB): 32413
  Allocated Data Disk (MB): 49152
  Allocated Binary Disk (MB): 3907
```

```
Allocated Secondary Disk (MB): 0
```

例

次の例では、3つのリソース プロファイルを追加します。

```
Firepower# scope ssa
Firepower /ssa # enter resource-profile basic
Firepower /ssa/resource-profile* # set description "lowest level"
Firepower /ssa/resource-profile* # set cpu-core-count 6
Firepower /ssa/resource-profile* # exit
Firepower /ssa # enter resource-profile standard
Firepower /ssa/resource-profile* # set description "middle level"
Firepower /ssa/resource-profile* # set cpu-core-count 10
Firepower /ssa/resource-profile* # exit
Firepower /ssa # enter resource-profile advanced
Firepower /ssa/resource-profile* # set description "highest level"
Firepower /ssa/resource-profile* # set cpu-core-count 12
Firepower /ssa/resource-profile* # commit-buffer
Firepower /ssa/resource-profile #
```